

人生いろいろ、咲き乱れよう

きよす かよ
清洲 郁代

近畿高等看護専門学校

母性がとりもつ縁

金沢の頼先生からバトンを渡された清洲です。頼先生とは看護学生時代の同級生で3年間同じ寮で過ごした仲です。卒業実習で母性を選んだのが頼先生と私、そして大久保由香里さんの3人でした。それぞれ住む地域は違っても、この仕事が好きということでは3人とも同じ。いつ会っても話がはずみます。

頼さんが開業すると聞いた時は「あの石橋をたいて渡る人が？」と驚いたのですが、その後の奮闘努力ぶりにはやはり私をして「頼先生」と呼ばせてしまうものがあります。

懲りない私

さて、私はというと、京都大学医療技術短期大学専攻科在学中より「すぐやめちゃだめよ」と周囲に心配されるほどいい加減な人間。卒業後も助産婦街道一直線とはいかず、フラフラ寄り道ばかりです。

助産婦1年目は大阪の大学病院に勤務。医師たちも珍しいという症例ばかりに出くわして、ニックネームは「おしん」。ハイリスクのお産がこわくて勤務中は食事ものどに通らないくらい緊張していました。今は貴重な体験をさせていただいたと思いますが、当時は助産婦としての判断も何もあったものではなかったのです。

結婚後京都に住み、次に勤務したのは民間病院の内科・小児科・産婦人科の混合病棟でした。心筋梗塞の患者さんに検温時「胸は痛くないですネ」

とたずねたり、生後8か月の赤ちゃんの採血に苦労したり、癌末期の女性のひと握りになってしまった髪を洗って涙したり、実にさまざまな経験をしました。

私が初めての妊娠中、イライラしていると、年配の患者さんが優しい言葉をかけてくれて、ずい分救われたものです。

その病院では分娩件数も少なく、助産婦も医師も拘束体制をとっていました。場合によっては日勤からひき続いてひと晩産婦さんと一緒ということもあり、重労働ながら、無事赤ちゃんが産まれた時の喜びは格別で、私はこの仕事のとりこになっていきました。

仕事への迷い

この仕事を続けたいという気持ちが強くなる一方で、夫の仕事はますます多忙となり、子どもの世話も私の肩にのしかかってきました。つとめていた病院が大きく新しくなり産婦人科病棟がオープンした頃から、夜勤月10回が物理的に困難になりました。しかし、今まで築いたものを捨てがたく、月6回夜勤をこなすパートタイマーという身分になりました。それでも私はそこで働きたかったのです。病院においてノルマの夜勤数をこなせない人間の肩身の狭さ、サラリーマン稼業の無常さを味わいました。

そして2人目を出産。出産後は、病棟の助産婦が足りているということで外来勤務で、いろいろな科をくるくる回りました。

このころよく同じ夢を見ました。早朝の光のさし込む静かな分娩室で、排臨から始まり、ゆっく



り児が娩出するまでの、なごやかなよいお産の夢です。助産婦としての実践が不可能ならせめて夢でと思ったのでしょうか。そんな未練たらしい自分がおかしくて、哀しくて、愛しくて……。

また、子どもの通っている保育園の保母さんに「パートまでしてなんで看護婦(助産婦との区別はわかりにくいらしい)にこだわるんですか」と素朴にたずねられたこともあります。

そのとき、保母さんの問いに対して私はとっさにこう答えました。「私は1人で助産婦になったのではないから」と。

私は、自分の勝手や1人の力でこの仕事ができるようになったのではありません。この世に生を受けてから、両親をはじめたくさんの人との関わりの中で私は成長しました。だからその分誰かの役に立ちたいと思っています。きざなようですが、この気持ちは私の原点であり、自然なものなのです。

けれども、私の夫が医師であることもあり、経済的に特に必要に迫られていない者が4歳と4か月の2人の子どもを預けてまで働く、そんな価値のある仕事か、と問われると、迷っていた私の心をのぞかれたようでショックでした。専門職と主張しても世間の認識はこんなものだと思いき知らされたような気がしました。

私は揺れていました。半ば意地になっている自分、なぜ助産婦をやっているのか理由がわからない自分に苦しみました。そして夫の1年間の研修を理由に退職しました。

退職後は、気分は晴れなかったものの、どこかスッキリしました。京都と空気の違う神戸で「主婦」を体験。今まであわただしかった子どもとの関

係、夫との関係を考えるよい1年でした。主婦業もたいへんだと素直に実感しました。また、家事の合間に楽しむ六甲山系からの清流住吉川の散策は素晴らしいものでした。

自然体で生きる

現在は縁あって定時制の看護学校で教員も動きを始めて3年目になります。

働きながら学ぶ学生さんには本当に頭が下がります。学生さんには自分を大切に、その時その時悩みながらもすすむべき方向を選択できる力をつけてほしいと思います。私は温かく学生さんを励ましたい。私がコントロールするのではなく、注意深く見守りたいと願っています。今は分娩の夢を見ることはなく、気になる学生さんがよく登場してくれます。

私の卒後10年余りは、そんなこんなでかつこのよいものではありませんでした。ズッコケ人生です。おまけにこの5月18日には予定外の3人目を出産しました。

学生さんが「先生、早く帰ってきて」と言ってくれます。私を必要としてくれる人、待っていてくれる人がいること自体しあわせです。またいろんなことにぶつかり迷惑をかけながら、バタバタ仕事をしようと思います。

* * *

今度バトンタッチするのは兵庫県加古川市の大久保由賀里さんです。学生時代から人の面倒をよくみる優しい女性です。彼女も卒後いろいろなこだわりを持って頑張っています。実にまじめでまめめめしく働く彼女の話を書いてみましょう。